

平成 30 年 12 月 25 日

審査報告

学位請求者：深 澤 敦 仁

(主査) 専 修 大 学 文 学 部

教 授 土 生 田 純 之

(副査) 専 修 大 学 文 学 部

教 授 高 久 健 二

(副査) 東 北 学 院 大 学 文 学 部

教 授 辻 秀 人

(副査) 専 修 大 学 文 学 部

准 教 授 田 中 禎 昭

審査委員会は、提出された本論文を問題関心、研究の先進性、論文構成の説得性、研究の到達点、考古資料収集の広さと実証性、将来展望の観点から審査した。また、口述試験において、直接、請求者本人より上記の審査観点についての判断材料を得た。

1 本文の骨子と評価

本論文は、群馬県（上毛野）における弥生後期から古墳時代前期の推移を跡付けたうえで、いかなる要因によって当該地域が、弥生社会を脱して古墳時代社会を成立させたかを追究した労作である。

まず第 1 章において本論文の目的等を明らかにする。ただし、弥生時代から古墳時代に移行する過程の問題を扱うには、当然年代的指標、つまり確かな編年体系の確立が要求される。このため第 2 章では当該地における前半期古墳時代の代表的土器型式であり、年代的指標となる石田川式土器編年を跡付ける作業から始める。石田川式土器の編年はかねてより実施されているが、著者は既往の編年を直接単に利用するのではなく、それらを踏まえたうえで今一度再検討を行った上で年代の指標とした。その際、樽式、吉ヶ谷式、箱清水式、十王台式土器など弥生時代の諸型式土器の混在を手がかりに、人々の移動を考察する。こうした人の動きを背景としたうえで第 3 章において、特に古墳時代になると東海系土器及び北陸系土器の流入を手がかりとして、諸小地域間において共通の年代的指標を得ることにした。これは上毛野の中における各小地域の差異を認めたとうえでその意味を探り、かつ共通の年代的指標を外来系土器の共存に求めるという手堅い手法である。

こうして得た年代的指標のもと、第 4 章及び第 5 章において弥生時代的な周溝墓から古墳時代社会を象徴する高塚墳墓（古墳）の成立に至る過程を丁寧にたどる。特に古墳時代前期古段階における前方後方形周溝墓の成立を大きく評価して、これが次段階、すなわち古墳時代前期中段階には高塚古墳を構築するようになる。その際、副葬品の様相を始め、墳丘構築技術、他遺構との切り合い関係

など、現在知りうるあらゆる要素を総合して検討を行った。

以上の検討を経たうえで、第 6 章及び第 7 章では、上毛野における古墳時代社会の成立は、様々な地域との交流、特に東海西部との交流（当地における古墳時代成立期の土器型式である石田川式土器の誕生とも深くかかわっている）のもと、在地の主体性をも相まって東国屈指の勢力を誇る上毛野の古墳時代社会が成立した。本論文は、こうした上毛野における古墳時代社会の成立過程を一つ一つの要素に分離・検討を加えたうえで、総合化を図った論文として見事に古墳時代社会の成立過程を描いた論文であり高く評価できるものである。

3 今後の課題

本論文は、上記において逐一述べたように上毛野における古墳時代社会の成立過程を様々な観点から総合的に考察した秀作である。しかし、学問には終着駅はなく、今後の研究に期待しなければならない諸点もなお存在する。以下、このことについて整理しておきたい。

まず、問題点というよりも論の進め方について。本論文では本人の性格もあってか、繰り返しの多さと、あいまいな表現が目立つ。例えば、周溝墓と高塚古墳との相違については、論を進める初期段階に相当する周溝墓の部分で両者の相違点に言及せず、高塚古墳の項に至ってようやく両者の相違点を丁寧に跡付けている。また、外来系土器型式の流入の背景としては、当然人の移動が考えるが、相当に考察した後でこうした歴史背景に言及している。恐らく動かぬ証拠を積み上げたうえでこうした直接的な歴史動向を描こうという心つもりであろう。しかし、読者の側から見れば、明らかにそのような方向性が垣間見えるにもかかわらず相当に待たされた感はぬぐえない。むしろ、筆者の研究姿勢・解釈の方向性を始めに述べたうえでそうした方向性が妥当なものであるか否かを立証する方が読みやすく思われる。

次に記述内容について。周溝墓と高塚古墳との区別が必ずしも十分ではない。両者を分ける観点として、規模や構築技法、および副葬品に言及するが高塚古墳には小規模墳もあり、この古墳は周溝墓の中の大型のものよりもむしろ小型に属する。また構築技法については周溝墓の多くは削平されており、このため古墳に比して簡単に削平される構造であると推測しているが、明確に捉えたわけでは必ずしもない。

深澤氏は口述試験において、こうした指摘を踏まえ今後も本研究を続けることを表明された。同氏は群馬県における代表的な現役の研究者であり、評価も高い。こうした評価をますます高める方向で研究を持続されることを期待する。

3 口述試験

土生田、高久、辻、田中の 4 委員によって行った。4 委員からの総括的質問と

個別的な質問に対し、深澤氏は適切かつ明快に答え、十分に対応したと判断できた。なお、傍聴者は11名であった。

審査委員会は深澤氏の学位（博士・歴史学）請求を妥当なものであると判定する。